

## 6 学生の受け入れ

### 大学院における学生の受け入れの適切性

大学院における学生の受け入れの適切性については、学生募集と入学者選抜の方法、学内推薦制度、門戸開放、社会人の受け入れ、外国人留学生の受け入れの各項に分けて、検証して行きたい。

### 1 学生募集方法、入学者選抜方法等

#### 1) 大学院研究科の学生募集の方法、入学者選抜方法の適切性

#### [現状の説明]

##### 修士課程

本学の大学院修士課程は言語文化専攻と思想文化専攻とに分かれ、言語文化専攻は日本語圏言語文化関係・英語圏言語文化関係・スペイン語圏言語文化関係の3つの研究領域から成っている。入試には一般入試と社会人特別入試と外国人留学生入試の3種類があるが、社会人・外国人留学生向けのものは当該項目で触れるので、ここでは一般入試について検証する。

修士の一般入試の募集定員は、各専攻6名ずつの12名である。秋季（10月中旬）と春季（2月下旬）の2回、入試を行っている。筆記試験と口述試験とで選抜を行う。筆記試験は専門科目と外国語科目（語学科目）の2科目。思想文化専攻の専門科目は哲学・宗教・日本文化史・東洋文化史・西洋文化史・美術史の6つの中から志望する研究分野を1科目選び、外国語科目（語学科目）は英語・スペイン語・フランス語・ドイツ語・中国語の5科目（英語圏言語文化・スペイン語圏言語文化の研究領域の場合、専門の外国語は除く。思想文化専攻は、漢文を加え6科目）の中から1科目を選んで受験する平成8年度～15年度の応募者数と合格者数

を下表に示す。

表 6-1 入試別志願者数

年度	志願者数（秋季・春季の内訳）	合格者数
平成8年度	22名（秋季14名・春季8名）	13名
平成9年度	20名（秋季10名・春季10名）	13名
平成10年度	22名（秋季6名・春季16名）	11名
平成11年度	29名（秋季12名・春季17名）	20名
平成12年度	28名（秋季14名・春季14名）	21名
平成13年度	30名（秋季16名・春季14名）	17名
平成14年度	32名（秋季14名・春季18名）	20名
平成15年度	24名（秋季11名・春季13名）	17名

次に、志願者を言語文化専攻・思想文化専攻の専攻別に示してみる（括弧内は合格者数）。

表 6-2 専攻別志願者数

年度	言語文化専攻	思想文化専攻
平成8年度	19名（11名）	3名（2名）
平成9年度	12名（6名）	8名（7名）
平成10年度	13名（5名）	9名（6名）
平成11年度	17名（11名）	12名（9名）
平成12年度	18名（14名）	10名（7名）
平成13年度	17名（10名）	13名（7名）
平成14年度	25名（16名）	7名（4名）
平成15年度	12名（7名）	12名（10名）

全体の志願者はほぼ20～30名で推移し、秋季と春季は、やや春季入試の方が志願者が多い。専攻別では、言語文化専攻が学部の日本語日本文学科・英語英文学科・スペイン語スペイン文学科の3学科に、思想文化専攻が文化史学科の1学科を基礎学科としているため、コンスタントに言語文化専攻の方が思想文化専攻より志願者が多くなっている。

##### 博士課程

本学の大学院の博士課程は人文学専攻の1つにまと

まった形で、文学・言語学・キリスト教思想・文化史の4つの専攻領域から成っている。入試は春季（2月下旬）の1回。出願資格のあるのは、修士の学位を得た者か当該年度に修得予定の者、またはこれに準ずる者である。修士の学位取得者のうち、官公庁・学校・研究所・企業等の現職に3年以上ある者は、一般入試と分けて専門職業人入試という別枠になる（入試科目は全く同じ）。博士課程の募集定員は5名である。専門科目の筆記試験と口述試験とで選抜している。専門科目は前掲の4つの専攻領域から1科目を選択する。英語圏・スペイン語圏専攻の場合それぞれの専門の語学に関する問題が出題され、キリスト教思想・文化史専攻の場合も語学（英語・スペイン語・フランス語・ドイツ語・ラテン語・中国語・漢文・古文書の中から1つ選択）の能力を測る問題が含まれる。

平成8～15年度の志願者数と合格者数（括弧内が合格者）は、平成8年度—8名（6名）、平成9年度—7名（1名）、平成10年度—4名（3名）、平成11年度5名（2名）、平成12年度—2名（2名）、平成13年度—3名（3名）、平成14年度2名（1名）、平成15年度—7名（2名）と推移している。平成9年度以降は、定員5名未満の合格者数に留まっている。

## [点検・評価]

### 学生募集と入学選抜の方法に関する点検・評価基準

本学の大学院人文科学研究科における、上記の学生募集と入学選抜の方法が適切か否か、次の基準により点検・評価を行いたい。

- (1) 入学選抜試験を全学的に適正に実施する体制が整い機能しているか否か。
- (2) 入学選抜における公正性・妥当性を確保できているか。
- (3) 目標とする数・質の学生を確保できているか。
- (4) 受験者・志願者に対して、受験前・入学前に必要かつ十分な情報提供・情報伝達が為されているか。

### 学生募集と入学選抜の方法に関する点検・評価

(1) (2) 大学院の修士課程・博士課程それぞれの授業を担当する教員全体で、入試問題の出題や取り纏め役を担当する形になっている（年度により交替）。大学院の入試問題は学部と異なり細かい校正を要する性質の問題ではないが、取り纏め役が難易度や過去の問題とのバッティング等をチェックした上で成稿している。試験問題の管理は入試・広報センター事務室長が一括して厳重に管理している。入試実施日は当該の専攻領域の教員全員で採点・面接に当たり、それらの合議により可否を審査し、研究科委員会の承認を得て

決定する。可否は純粋に受験者の筆記試験と提出論文の内容や、研究に向けた資質・意欲により決定される。

以上のように、組織としての協力体制の点でも公正性・公明性の点でも適正に運用できていると評価できる。

(3) 志願者・入学者の数の点。修士課程は毎年の志願者が20～30名、合格者が11～21名と、ほぼ安定している。概ね定員以上を受け入れるかたちとなっている。博士課程は上記の通り5名の定員に毎年合格者が届かない。

次に入学者の質の点。大学院での勉学は各人非常に専門的な個々の分野に分かれ担当教員の個人指導という面が強くなるため、一概に学生の学力や教育効果が測りにくい。また、修士課程の場合、博士課程への進学を目指すもの、教員ほか専門的職業に就く必要上、学部段階以上の勉学の場合において自己の実力のブラッシュアップを目指すことを目的とするものほか目的志向においていかほどの多様性を備えるところから、一律に研究者養成の尺度のみを以て、学生の到達水準を律することは適切でない。研究者養成の尺度を以てするならば、学位授与を最終的には目標とする博士課程進学の水準に達しない者は、十分でないと言えようが、その目的・志向に合わせての水準をもって質の査定とするならば、既述の進路状況に何えるように多くはその目的に叶う水準に到達し、社会に対して一定の寄与を果たし得ていると判断される。

(4) 事前の情報提示・情報提供の点では、例年前期中の6月下旬に学内で大学院説明会を開催し、大学院の性格・勉学内容・入試等につき、学部学生の大学院進学希望者を集めて説明を行っている。また、学内からの志願者に対しては、学部のそれぞれのゼミの指導教員が、大学院進学後の学問の専門性の高さや大学院終了後の進路の厳しさなどにつき、説明を施している。外部よりの志願者の場合、個々の事前問い合わせがあれば、当該分野の教員か入試・広報センターかできちんと対応するよう努めている。

## [長所と問題点]

入試の実施体制や公正な運用の点で、何ら問題はなからう。受験前の事前指導（情報提示）の点でも、少人数教育を謳う小規模校の利点を活かし、学部のゼミの中で適正に為されていると思われる。入学者数も、修士は今のところ適正な数を安定的に確保している。

敢えて問題点を幾つか挙げるとすると、まず入試の実施形態の点では、春季の入試が学部の在学生の成績提出期限の直後であり、ために大学院の入学選考の審

査論文を慌ただしく査読せねばならないことが挙げられる。

入学者の質の点にかかわっては、修士課程段階においては、教員を志望する学生ほかより高次の勉学の意欲を持つ学生には、教育研究環境の損なわれない限りできうるかぎりその意欲に応えることを心掛けているが、一定の水準の維持は目指されなければならないその境界のラインの調整に、折々に悩まされる。最も高い水準の学生は外部の大学院へ進学する一般的な傾向があるが、そうした学生達も本学大学院に進学してくるような魅力ある充実した大学院の創造に努力を続けていきたい。

博士課程の志望者に関しては、学位授与という高い専門的な知見と資質が要求される特別の課題があるところから、定員数を確保し得ずとも学位授与水準に見合う学生の厳格な選抜を心掛けている。従って、毎年定員未達の若干名しか合格者が出ないことも、やむを得ないところである。事前の情報提示の点では、学内はともかく学外からの志願者に対しては、十分な情報提示が難しい。大学院独自の広報を行う余裕がないため、問い合わせや訪問のあった個々の志願者に丁寧に対応するしかないのが現状である。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

入試の選抜考査とりわけ論文査読にある程度の余裕を持って対処できるように入試実施時期を再考したい。また、外部からの受験者が受験しやすい時期も顧慮して、実施時期については検討を加えたい。外部への情報提供・情報提示については、まずホームページの内容を拡充すること。そして出来得るなら大学院独自の案内パンフレットを作成することを努力目標としたい。

## 2 学内推薦制度

### 1) 成績優秀者等に対する学内推薦制度を採用している大学院研究科における、そうした措置の適切性

#### [現状の説明、及び今後の方針]

本学は、大学院の入試選抜において学内推薦制度を設けていない。また現時点においては、学内推薦制度を公的な場で検討、議論する機会も持っていない。当面はそうした状況が持続するであろう。

## 3 門戸開放

### 1) 他大学・大学院の学生に対する「門戸開放」の状況

#### [現状の説明]

平成9年度以降、大学院の入学者のうち外部の大学からの志願者・合格者の数（括弧内が合格者数）は、修士課程が平成9年度—7名（4名）、平成10年度—8名（3名）、平成11年度—12名（7名）、平成12年度—7名（1名）、平成13年度—7名（3名）、平成14年度—13名（5名）、平成15年度—7名（3名）、博士課程が平成9年度—1名（0名）、平成10年度—1名（1名）、平成11年度—1名（0名）、平成12年度—1名（1名）、平成13年度—1名（1名）、平成14年度—0名（0名）、平成15年度—2名（0名）となっている。

#### [点検・評価]

##### 門戸開放に関する点検・評価基準

本学の大学院人文科学研究科における、上記の門戸開放の現状が適切か否か、次の基準により点検・評価を行いたい。

(1) 他大学・他大学院の学生に対し、どれだけ「門戸開放」が実現できているか。

(2) 本学大学院の在學生に対し、学内での束縛をかけていないか。

##### 門戸開放に関する点検・評価

(1) 毎年コンスタントに一定数の外部学生が志願して来ている。また、上記の数字を見ると修士課程に関して、内部進学者に比べやや合格率が低いようにも見えるが、外部志願者は入試を欠席する場合もあるため、実際の合格率は内部進学者とさほど差はない。博士課程も、十分な能力・資質があると判断すれば、上記の通り外部から受け入れている。本学では内部も外部も区別せず同じ基準で選抜を行っている。適正な「門戸開放」ができていると言える。

(2) 明確なデータはないが、毎年相当数の学部学生が他の国立大・私立大の大学院へ進学している。大学院修了後の進路が厳しい現状を考えると、学生がより知名度が高く伝統のある大学院への進学を望むのは無理からぬところである。個々の教員も自己のゼミ内の大学院進学希望者に対して、本人の将来を考え色々な選択肢を示す形（＝内部拘束をしない）の指導を行っている。

### [改善の方向性]

外部に対する門戸の開放、外部の大学への進学、ともに適正に行われていると判断される。外部からの優秀な志願者の増大をめざし、また内部から優秀な学生が本学大学院に進学することを一つの目標とするならば、本学大学院の充実と魅力を高めることをおいて外にない。時間を掛けた日常的な努力が求められるところであろう。

## 4 社会人の受け入れ

### 1) 社会人学生の受け入れ状況

#### [現状の説明]

本学大学院の修士課程の社会人特別入試は、原則として社会人としての5年以上の経験を有する者を対象とし、筆記試験（志望する研究領域の専門科目、及び小論文）と口述試験で合否を決定する。外国語でなく小論文を課すのが、一般入試との違いである。

平成9年度以降の毎年の社会人の志願者・合格者の数（括弧内が合格者）は、修士課程が平成9年度—5名（4名）、平成10年度—2名（1名）、平成11年度—2名（1名）、平成12年度—5名（3名）、平成13年度—5名（2名）、平成14年度—3名（1名）、平成15年度—2名（1名）、博士課程は平成9年度に1名受験して不合格で、それ以降志願者がいない。

#### [点検・評価]

##### 社会人の受け入れに関する点検・評価基準

本学の大学院人文科学研究科における、上記の社会人受け入れの現状が適切か否か、次の基準により点検・評価を行いたい。

- (1) 社会人の受験者に対する選抜方法は適切か。
- (2) 社会人受験者に対して、受験前・入学前に必要かつ十分な情報提供・情報伝達が為されているか。

##### 社会人の受け入れに関する点検・評価

(1) 社会人が大学教育から離れてしばらく経っていることを考慮して、入試科目から（専門ではない）外国語科目を外す等の配慮を行っている。上記の通り、修士課程には少数ながら毎年志願者があり、合格率も現役学生と差がない。適切かつ公正に選抜が行われていると言って良い。

(2) 志願者が本学学部の卒業生である場合は、出身の学科や学部時代の指導教員と連絡を取り、必要な情

報提供や助言を受けている。それ以外の社会人志願者に対しては、他大学よりの志願者同様、訪問や問い合わせに応える形で対処している。

### [長所と問題点]

本学大学院では、入学・進学直後に、学内で大学院在学生在が主催する形の新入生歓迎会が開催されている。学年や専攻を越えて大学院生同士が交流を持ち情報交換をする良い機会となっている。全体に学部同様に小規模でアットホームな雰囲気の中、現役学生と世代や気質の異なる社会人学生も溶け込み易い状況は達成されていると判断される。

問題点を挙げるとすると、大学全体の広報予算が限られており大学院独自の広報をほとんど行えないため、なかなか外部に向け情報提供がしにくい点が挙げられる。また、夜間の授業がないため、社会人が仕事を続けながら学業と両立させることは極めて困難である。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

情報提供の点では、ホームページの拡充を図ること。夜間の授業開設については、検討に値するものの、実際には本学のスタッフ数や設備、採算の面を勘案すると困難であることが予測される。

## 5 外国人留学生の受け入れ

### 1) 外国人留学生の受け入れ状況

#### [現状の説明]

一般入試とは別に外国人留学生入試を設けている。筆記試験（志望する研究領域の専門科目と外国語科目、外国語は母語以外）と口述試験で合否を決定する。

平成9年度以降の志願者数・合格者数（括弧内が合格者）は、平成11年度、平成12年度に各1名の志願者があり、平成11年度は合格、平成12年度は不合格となっている。博士課程は平成14年度に1名受験し合格している。他の年度は志願者がいない。

#### [点検・評価]

##### 外国人留学生の受け入れに関する点検・評価基準

本学の大学院人文科学研究科における、上記の外国人留学生受け入れの現状が適切か否か、次の基準により点検・評価を行いたい。

(1) 外国人留学生受け入れにおける選抜方法は適切か。

(2) 外国人留学生の受験者に対して、受験前・入学前に必要かつ十分な情報提供・情報 伝達が為されているか。

#### 外国人留学生の受け入れに関する点検・評価

(1) 外国人であっても日本の大学（本学を含む）を卒業している場合「外国人留学生」扱いとならず、一般入試を受けなければならない。よって、日本語能力等でハンディを持つ外国人学生にとっては、入試がかなりのハードルの高さになっている点は否めない。選抜の公明性は問題なく保たれている。

(2) 本学学部の在籍者である場合は、大学院説明会や個々の教員の個別指導により、必要な情報提供・指導が適宜なされている。が、外部よりの志願者である場合は、事前の情報提供が多くは望めないのが現状である。

#### [長所と問題点]

社会人学生と同様、受け入れ後、進学者が馴染みやすい雰囲気を作ることに努力している。国際交流センターや学生サポートルーム等で、学部の留学生に対するのと同様に、大学院留学生に対しても心理・生活面でのサポート体制を築いている。

問題点は、前述の通り、学部在学する外国人留学生にとって、日本人学生と同じ条件で受験せねばならない現状の大学院入試がかなり高いハードルとなっている点である。

事前の情報提供については、大学院の独自の広報が国内向けにも難しい状況である故、国外に向けては猶難しい。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

入試については、日本国内の大学を卒業した外国人留学生でも高校まで外国にいた場合は、日本人と別枠の「外国人留学生入試」を受験できるように早急に規程改正を行いたい。

情報発信・情報提供については、大学のホームページの大学院の項目を充実させたり、中国語や韓国語の案内を作ったりという改善が望まれる。海外の提携大学との交流の中で、お互いの大学院の情報交換をする機会も増やしていけたらと考えている。

## 6 科目等履修生、研究生等

### 1) 科目等履修生、研究生、聴講生等の受け入れ方針・要件の適切性と明確性

#### [現状の説明]

平成 5 年 4 月の大学院開設以降、科目等履修生・特別研究生（大学院研究生を「特別研究生」と称する）・聴講生などの受け入れを実施してきており、社会に対して開かれた大学院であることを指針としている。

科目等履修生は、1 学年以内を履修期間とし、10 単位以内の科目の履修ができる。

特別研究生は、1 学年以内を期間とし、さらに研究科委員会の許可を経て 1 年の延長をすることができる。

聴講生は、1 学年以内を聴講期間とし、3 科目以内の聴講ができる。

以上の条件のもとに受け入れており、現在の実績としては、平成 13 年度、平成 14 年度、平成 15 年度までの 3 年間で、科目等履修生は 1 名、特別研究生は 5 名、聴講生は 2 名である。

#### [点検と評価]

人数が多いとは決して言えないけれども、少人数の大学院としては途切れることなく、籍を置く者たちがいる。実効をあげていると評価しているが、いっそうの充実のために努めたい。

#### [改善の方策]

さらなる充実のために、特色あるカリキュラムの編成を図るように努める。

## 7 定員管理

### 1) 恒常的に著しい欠員が生じている大学院研究科・専攻における対処方策の適切性

#### [現状の説明]

過去 5 年間における各専攻の入学人数は下表のとおりである。

修士課程の 2 専攻については、2002 年度の思想文化専攻を除き定員を満たしているが、博士課程については平均して 4 割しか満たしていない。

### [点検と評価と改善の方向性]

修士課程に関しては、2002年度の思想文化専攻において定員を割った年があるが、こうした例外的な特異な年を除いては、両専攻共に問題はない。問題は、博士課程人文学専攻の場合であるが、志願者を全て受け入れるならば、問題はかなり改善される。しかし、学位授与を行う社会的責任を考えるならば、やはり一定水準の質を持った学生を選抜せざるを得ない。一定水準の質を持った志願者をもって定員枠を充足させるた

めには何よりもまず本学大学院の充実と魅力、そして学位授与の実績を積むことであろう。平成15年3月、本学で初めての博士の学位授与者を出したが、平成16年度においても順次学位授与者の引き続くことが期待されている。すでに大学院の人的組織体制を強化し、学位授与に至るプロセス・システムの改革を行い、カリキュラムの改善等も行いつつあるが、こうした地道な努力の積み重ねによって問題点の解決を図っていききたい。

表 6-3 各専攻入学者数

専攻名	入学定員	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	平均
言語文化	6	11 (183%)	13 (216.7%)	8 (133.3%)	12 (200%)	7 (116.7%)	10.2 (170%)
思想文化	6	9 (150%)	7 (116.7%)	7 (116.7%)	1 (16.7%)	6 (100%)	6 (100%)
人文学	5	2 (40%)	2 (40%)	3 (60%)	1 (20%)	2 (40%)	2 (40%)

## 「6 学生の受け入れ」の総括

入学者選抜の方法は、公明性・透明性・平等性を堅持して運用されている。志願者数入学者数は既述の如く修士課程においては、稀な例外的年度を除いて、安定的に定員を充足している。一方、博士課程はなかなか定員充足にいたらず本大学院の重要な課題であるが、既述したような改革の努力の上に時間を掛けて現状を是正していきたい。問題点としてあげた修士課程の入試時期の再検討はまずは入試広報委員会において討議・検討を行ってみたい。

大学院進学に関する情報提供の問題は、本学学部生に関しては、学内で開催される説明会やゼミの教員による指導、またグループアドバイザー制度などの学生サポート体制等々によって十分な助言・情報提供がなされていると判断される。但し他大学の進学志望者や外国人・社会人の本大学院進学志望者に関しては、学部と異なり、大学院独自の広報宣伝活動を行うことが困難である故に、情報提供は不足していることが否めない。その点をホームページの充実や本学が持つ研究所（人文科学研究所・キリスト教文化研究所・言語教育研究所）の研究啓蒙活動との連携などを通して補っていければと考えている。また、外国人留学生については、種々のハンディを考慮し、入試においては日本人学生と別枠の「外国人留学生入試」を受験できるように規程の改正を早急に検討したい。社会人に向けての夜間授業の開設は検討に値するもののその前提条件の整備が必要であり、これは早急には実現し得ない問題事項であろう。